

新川の民衆抗議行動の歴史を紐解く

2021.05.14to

1. はじめに

富山県東部一帯「新川域」では、明治初期に「ぼんどり騒動」、60年後の大正期には「越中米騒動」という民衆による大抗議行動が発生した。これらの運動が一揆や蜂起ではなく、あくまでも社会に対する抗議行動であったこと、新川一帯で目に見えない連帯があったことが特徴である。なぜかといえば、ぼんどり騒動は白岩川流域から始まって新川全域を巻き込んだ運動であり、米騒動は新川一帯でほとんど同時多発的に発生した運動であったことを理由に挙げたい。

そこで著者はさらに考えを推し進めて、新川域一帯には共同体意識が潜在的に形成され、しかもこれは、自然発生的であり、その源には新川域の地形的共通性があったとみている。もちろん、これは一つの見方であるが、ここではそのような見方を念頭に置いて両運動の基盤に目を向けて、運動の本質を以下の順で論じたい。

- ・新川域(図1)とは水橋、滑川、三日市(黒部)、入膳(入善)と泊を含めた一帯(新川郡)である。この域で、自然状況も社会的環境も非常に似通っていて、街の成り立ちや生業も共通していることをみる。
- ・そんな新川について、街を含めた生活空間が地形と関連できることによって、民衆による激動の歴史を紐解くことにする。

2. 新川の特徴

新川の自然的条件、社会的条件について述べる。目的は、これらの条件をもとに両運動を解釈してみるためである。

2.1 新川郡の共通点

(1)新川郡全域の特徴・共通点

- ・地形：急勾配河川流域、扇状地、(図1)
- ・生業：米作農業、沿岸漁業、
- ・町：沿岸域(沿岸部)にて発展
- ・街道：生活道、交易道、連携道(街を互いに関連)
- ・社会運動：目に見えない連帯が広範囲な纏まり様相
- ・漁業：富山湾が結構深い。特に新川郡沿岸は県西部に比して水深が深く、海流が沿岸近くまで流れ、良好な漁場が形成されている。こうした漁場を目前にする沿岸各域にて漁業の町が栄えている。

(2)県東部と県西部の比較、街道や街の形成について

- ・県内の地形的特徴として、西部の堆積平野域、東部の扇状地平野域があり、土地の様相を特徴づけている。
- ・街道については、西部では内陸を通り、東部では沿岸部を通っている。
- ・農耕地については、西部は肥沃な土地柄であり、東

部は扇状地ゆえに本来は不向きである。

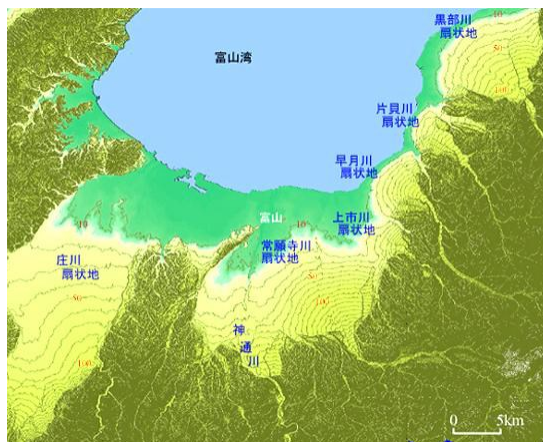


図1 富山の扇状地分布図 国交省 HP より

2.2 街

街のできる要件を列挙する。

- ・生業から；漁業ならば沿岸地、農耕ならば平坦地
 - ・生活から；生活に便利(利水)、交易に便利
 - ・安全性から；洪水にあわない、洪水を避ける
 - ・発展要件：街の拡大には広い平坦地、他域と繋り
- 新川郡では、豊富な漁場が沿岸にまで達していることで沿岸域にいくつもの町が立地し、交易路も当然そうした町を結んでいる。

2.3 街道

街道には人の往来や物資の輸送に加え、連携道の役割もあり。各町が目に見えない連携の担い手としての街道、連携を深めるための街道といった面があることに留意したい。なお、街道は時には軍隊の進軍路や社会運動の民衆の進撃路ともなった。

3. 新川大農民一揆(越中ぼんどり騒動)、抗議の進撃

(1)概要：

1859年(明治2年)、新川郡では大変な凶作(平年比7割減)となった。10月12日には東加積組(現滑川市)の農民が年貢減免の嘆願を皮切りに、22日からは白岩側流域の農民が集会を持ち、そこにて宮崎忠次郎が指導者として推挙され、忠次郎により6項目の改革案が練り上った。

この改革構想をもとに25日に群治局に嘆願したところ、群治局はこれを無視し、農民には威圧的な態度でのぞんだ。これを受けて29日には、農民は舟橋村の無量寺境内に1500人程結集し、魚津にいる新川郡を代表する十村に抗議するために、「ぼんどり」(肩掛けのみの蓑)を着て鉞・竹槍・旗をもち、滑川を通り魚津へと向かった。行く先々では、その地域の農民が隊列に

加わり、富農や村役人宅を襲った。

その後、一向は魚津からは黒部を通り入善まで進撃し、10月2日には泊に到達した。結局一揆隊は総勢2.3~5万人にも達した、新川域の大農民一揆となった。10月3日、入善にて出動してきた藩兵により宮崎忠次郎が捕えられ、抗議運動が鎮圧された。これが越中ばんどり騒動という社会抗議運動である。

(2)藩の対応：

加賀藩では、農民からの年貢を恒常的に確保するために、凶作年には年貢の減免や救済米供出などをそれなりの凶作対策が講じられていた。特に一揆が多発していた越中西部域ではそれなりの対応がされていたが、東部域では対応がおろそかであったという。ただし、郡治局(郡奉行)役人や村役人は、農民一揆には反対に回っていたことはいうまでもない。

(3)抗議運動：

従来の農民一揆は年貢減免(のみ)を掲げた直接行動であった。新川の一揆はこれまでとは違って、減免請願とともにこれまでの農政制度について抗議と改善要求であった。忠次郎は後世から見ても画期的な改善6項目を策定した。以下に4項目のみ記す；

- ・京枅使用。理由；農民が役所に米納入の際は大枅を、逆の際は小枅を使用した。役所の不正の防止。
- ・御蔵番人の排除。理由：役人による不正の防止。
- ・十村、手代、肝煎の役人の公選。理由：これは郡治局とグルの村役人について人事の公正化。
- ・越訴(おっそ) (代表者による直訴)。

この騒動の根本原因は農政民政を十村に任せて、役所全体が不正に走ったことにある。(郷土歴史家玉川信明氏によれば加賀藩役人の(明治という)時代の変化を理解できない保守主義と無能さが原因という)

(4)一揆の結末：

断罪に処せられたのは忠次郎一人であり、農民はおとがめなしであった。

なぜか。抗議運動が理路整然として農民の支持を得

ていたこと、権力側



写1 無量寺での決起集会 (舟橋村物語より)

では一揆農民に正しく対応できなかった非があったことが挙げられる。

これより役所は過度の処分を下せず、結局は新川郡内の十村を更迭し、事態の收拾を図った。

(5)支配機構：

加賀藩庁>新川郡治局(郡奉行)>村役人(十村、肝煎、村肝煎、組頭頭、百姓代) といった構成。

十村は江戸期の新川郡では12人。肝煎は(庄屋や村長クラス)は各村に置かれていた。

4. 民衆による一大抗議運動(越中米騒動)

(1)概要：

富山においては明治期、米商人が安い富山米を買い占め、県外で高く売って巨利を得ていた。1918年(大正7年)、政府のシベリア出兵を機にコメの投機的買い占めが始まり、米価が高騰した。

日頃の米価高騰に苦しめられていた新川の民衆のうち、魚津の主婦たちが港に停泊の米運搬船へのコメ積み出しを阻止した。これがたちまちのうちに全国に知れわたり、各地で民衆が蜂起したが、軍隊によりすべての騒動が鎮圧された。

(2)発祥地論議：

米騒動はほとんど同時期に新川一帯で起きたことが重要であるが、発祥地は大きな関心事でもある。そもそもの発祥は東水橋であり、その後、滑川や魚津にも勃発。魚津では騒動の参加者が多く、かつ新川随一の町であったことに加えて当時の米蔵が現存していたこともあり、発祥の地は魚津とされている。

(3)特徴：

米騒動は米の買い占めや米価の不当つり上げに抗議した社会運動そのものである。富山の場合、漁民のお母ちゃんたちが「米を持っていくな」と停泊の米運搬船への米積み込み阻止に体を張ったのである。こうした抗議運動は暴動にあらず、処分者を一人も出さなかった理由である。

ではなぜこうした抗議行動が整然とできたのであろうか。1859(明治2)年に起きた農民一揆(越中ばんどり騒動)が一役かっている。この騒動が理路整然とした抗議行動であったので、権力側は農民の願いを無視し過度の弾圧・鎮圧に走れなかった。その経験が生かされ、

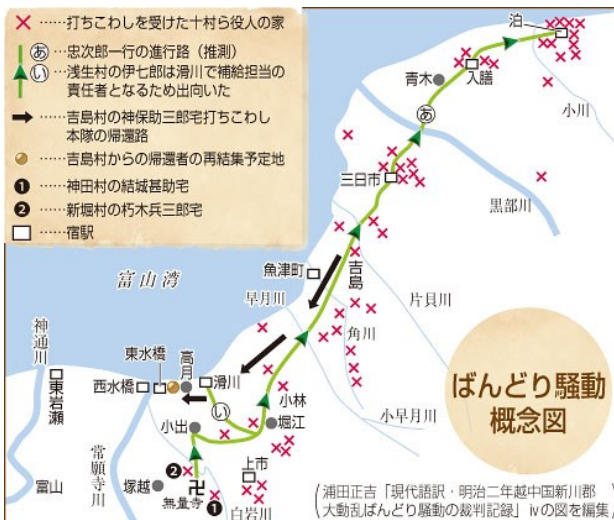


図2 ばんどり騒動概念図 北日本新聞web版より

米騒動のときは権力側に付け入るスキを与えなかった、といわれている。

(4)後世の評価：

民衆の大抗議運動として特筆すべきこの運動が近代民主主義の原点として位置づけられるようになったものの、大方は一事件という捉え方である。

最近になって抗議行動が本質ということが開明的な人を含めてやっと定着した。(一般にはまだ浸透不十分である)

5. おわりに

新川域を俯瞰すると、新川域を一路(街道)一帯と捉えて、特徴的な風土を浮き彫りにし、併せて新川域発祥の民衆の一大社会運動を民主主義として捉えることができた。これをもって、日本の民主主義の原点ここにあり、として結ぶことにする。

参考・引用文献

- 1) 富山県内扇状地形、国交省 HP
- 2) 中世から近世へ、舟橋村物語
- 3) ぼんどり騒動(上)、北日本新聞ウェブ、2018. 5. 19
- 4) 米騒動 100 年展覧会カタログ、滑川市立博物館、2018. 7



図3 騒動発生地 滑川博物館カタログより



写2 上：米の積み出し 滑川博物館カタログより
下：現存の米蔵